

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書文学特殊研究 a	田中 光	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 特になし。	
<授業のテーマ> 詩編の解釈とその解釈をめぐる学問的議論		
<到達目標> 詩編の言葉を原典や諸翻訳（古代語訳含む）によって丁寧に読み、その神学的メッセージを理解すること。また同時に、詩編を巡る学問的議論に深く精通すること。		
<授業の概要> 詩編を皆で注解的に考察し、適宜個別のトピックの考察も行いながら、演習形式で授業を進める。学生の皆さんには、その日の授業で割り当てられた毎回の詩編を事前に原典でできるだけ読んでいただき、また注解書その他の二次資料も読んでいただいた上で、授業にのぞんでいただく。授業では詩編の言葉を原典を参照しながら読み進め、詩編の言葉の解釈を巡る議論を互いに紹介し合いながら、詩編の言葉を深く把握することを目指す。尚、前期では詩編 8-12 編を扱う。		
<履修条件> ヒブル語を既に受講していること。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション&イントロダクション+詩編研究史概観① 第2回 詩編研究史概観② 第3回 詩編 8 編① 原典の講読 第4回 詩編 8 編② 解釈に関する討論 第5回 詩編 9 編① 原典の講読（前半） 第6回 詩編 9 編② 原典の講読（後半） 第7回 詩編 9 編③ 解釈に関する討論 第8回 詩編 10 編① 原典の講読（前半） 第9回 詩編 10 編② 原典の講読（後半） 第10回 詩編 10 編③ 解釈に関する討論 第11回 詩編 11 編① 原典の講読 第12回 詩編 11 編② 解釈に関する討論 第13回 詩編 12 編① 原典の講読 第14回 詩編 12 編② 解釈に関する討論 第15回 全体のまとめ		
<準備学習等の指示> 事前に次回扱う詩編を原典で読み、解釈上の課題を注解書で把握しておくこと。また、授業で扱う詩編を巡って、どのような学問的議論がなされているのかということについても、事前に調べておくこと。尚、進度には若干の変更が生じる場合がある。		
<テキスト> BHS、聖書諸翻訳		
<参考書・参考資料等> 飯謙「詩編」池田裕他監修『新版 総説旧約聖書』日本キリスト教団出版局、2007年、421-437頁を事前に読んでおくこと。また、詩編研究の諸相をより深く理解するために、本授業が開講されている間、次の文献の必要箇所（適宜指示する）を読み進めることが望ましい。Brown, W. P. ed. <i>The Oxford Handbook of the Psalms</i> . Oxford: Oxford University Press, 2014. その他の文献については初回授業にて指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 各授業における予習・参加度の度合いと、各期末のペーパー（8000字程度）によって評価する。尚、評価は「共通評価指標：講義・演習」に基づいて行う。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書文学特殊研究 b	田中 光	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 特になし。	
<授業のテーマ> 前期と同じ。		
<到達目標> 前期と同じ。		
<授業の概要> 基本的な授業の概要は前期と同じ。後期では詩編 13-18 編を扱う。		
<履修条件> 前期と同じ。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション&イントロダクション 第2回 詩編 13 編① 原典の講読 第3回 詩編 13 編② 解釈に関する討論 第4回 詩編 14 編① 原典の講読 第5回 詩編 14 編② 解釈に関する討論 第6回 詩編 15-16 編① 原典の講読 第7回 詩編 15-16 編② 解釈に関する討論 第8回 詩編 17 編① 原典の講読（前半） 第9回 詩編 17 編② 原典の講読（後半） 第10回 詩編 17 編③ 解釈に関する討論 第11回 詩編 18 編① 原典の講読（三分の一） 第12回 詩編 18 編② 原典の講読（三分の二） 第13回 詩編 18 編③ 原典の講読（三分の三） 第14回 詩編 18 編④ 解釈に関する討論 第15回 全体のまとめ		
<準備学習等の指示> 前期と同じ。		
<テキスト> 前期と同じ。		
<参考書・参考資料等> 前期と同じ。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 前期と同じ。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書原典特殊研究 a	大島 力	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 第二イザヤ書（40－55章）の積義的研究（1）		
<到達目標> 第二イザヤの思想を、ヘブライ語原典の構造分析によって解明していく方法を身につける。		
<授業の概要> イザヤ書40－42章に関して、語彙・文法的説明を基本に、文章構造とその思想を解明する。		
<履修条件> ヘブライ語文法習得者（中級以上が望ましい）。「旧約聖書原典積義 I a」と合同なので、積義を深め討論をリードすると共に、自ら研究課題を見出し、まとめる姿勢が求められる。		
<授業計画> 第1回 ガイダンス 第2回 イザヤ書40：1－8 第3回 40：9－11 第4回 40：12－17 第5回 40：18－26 第6回 40：27－31 第7回 41：1－7 第8回 41：8－13 第9回 41：14－16 第10回 41：17－20 第11回 41：21－24 第12回 41：25－29 第13回 42：1－4 第14回 42：5－9 第15回 42：10－13 総括		
<準備学習等の指示> 該当テキストの語彙的・文法的説明と、文章構造について考察をしておくこと。		
<テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensia(BHS)		
<参考書・参考資料等> F.Brown,S.R.Driver,and C.A.Briggs eds.,Hebrew and English Lexicon of the Old Testament.(BDB). L.Koehler and W.Baumgartner,The Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament.(HALOT). W.Gesenius,Hebräisches und Aramäisches Handwörterbuch über das Alte Testament,18.Auflage. その他、講義時に指定する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における意見表明と研究課題レポート（6000字以上）。レポートは「共通評価指標：講義・演習」によって評価する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
旧約聖書原典特殊研究 b	大島 力	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<授業のテーマ> 第二イザヤ書（40－55章）の積義的研究（2）		
<到達目標> 第二イザヤの思想を、ヘブライ語原典の構造分析によって解明していく方法を身につける。		
<授業の概要> イザヤ書42－48章に関して、語彙・文法的説明を基本に、文章構造とその思想を解明する。		
<履修条件> ヘブライ語文法習得者（中級以上が望ましい）。「旧約聖書原典積義 I a」と合同なので、積義を深め討論をリードすると共に、自ら研究課題を見出し、まとめる姿勢が求められる。		
<授業計画> 第1回 イザヤ書42：14－17 第2回 42：18－25 第3回 43：1－7 第4回 43：8－15 第5回 43：16－28 第6回 44：1－8 第7回 44：9－20 第8回 44：21－45：8 第9回 45：9－13 第10回 45：14－25 第11回 46：1－13 第12回 47：1－15 第13回 48：1－11 第14回 48：12－22 第15回 総括		
<準備学習等の指示> 該当テキストの語彙的・文法的説明と、文章構造について考察をしておくこと。		
<テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensia(BHS)		
<参考書・参考資料等> F.Brown,S.R.Driver,and C.A.Briggs eds.,Hebrew and English Lexicon of the Old Testament.(BDB). L.Koehler and W.Baumgartner,The Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament.(HALOT). W.Gesenius,Hebräisches und Aramäisches Handwörterbuch über das Alte Testament,18.Auflage. その他、講義時に指定する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における意見表明と研究課題レポート（6000字以上）。レポートは「共通評価指標：講義・演習」によって評価する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
聖書語学特殊研究 a	佐藤 泉	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>通年で履修するのが望ましい。	
<授業のテーマ>聖書の古代訳の一つにペシッタ（シリア語訳）がある。ペシッタを読むためのシリア語文法の基礎を学ぶ。さらに聖書の原典と古代訳との比較を行なう。		
<到達目標>①シリア語文法の基礎を身につける。②身につけたシリア語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、ペシッタを読むことができるようになる。③聖書の原典とペシッタや他の古代訳との比較を行なうことができるようになる。		
<授業の概要>練習問題に取り組むながら、ペシッタを読むために必要なシリア語文法を学ぶ。聖書の原典と古代訳との比較に慣れていく。		
<履修条件>ヒブル語履修済みであること。		
<p><授業計画></p> <p>第1回：序 シリア語を学ぶ意義等を話し、子音について（1）ヤコブ派の書体を学ぶ。</p> <p>第2回：子音について（2） ネストリウス派とエストラングラの書体を学ぶ。</p> <p>第3回：母音について ヤコブ派とネストリウス派の母音記号を学ぶ。</p> <p>第4回：代名詞について 人称・指示・疑問・関係代名詞を学ぶ。</p> <p>第5回：前置詞について 基本的なものをいくつか学ぶ。</p> <p>第6回：名詞について（1） 基本的な名詞について、ヘブライ語との比較をしつつ、その特徴を学ぶ。</p> <p>第7回：代名詞語尾について ヘブライ語と同様にシリア語も名詞等に代名詞語尾がつくことを学ぶ。</p> <p>第8回：名詞について（2） 母音の移動を伴うものを学ぶ。</p> <p>第9回：名詞について（3） 不規則変化するものを学ぶ。</p> <p>第10回：規則動詞について（1） Peal 形の変化、特に完了を学ぶ。</p> <p>第11回：規則動詞について（2） Peal 形の変化、特に未完了・命令・分詞・不定詞を学ぶ。</p> <p>第12回：規則動詞について（3） Ethpeel 形の変化を学ぶ。</p> <p>第13回：規則動詞について（4） Pael 形と Ethpael 形の変化を学ぶ。</p> <p>第14回：規則動詞について（5） Aphel 形と Ettaphal 形の変化を学ぶ。</p> <p>第15回：規則動詞について（6） 代名詞語尾のついた形の変化を学ぶ。</p>		
<準備学習等の指示>授業中に指示のあった練習問題等について、できる範囲で準備すること。ヒブル語の文法も参照しておくこと。		
<テキスト>Theodore H. Robinson, Paradigms and Exercises in Syriac Grammar, 3 rd .ed., Oxford University Press, London, 1949.		
<p><参考書・参考資料等></p> <p>William Jennings, Lexicon to the Syriac New Testament, Oxford at the Clarendon Press, 1926.</p> <p>Takamitsu Muraoka, Classical Syriac for Hebraists, Wiesbaden: O. Harrassowitz, 1987.</p> <p>Theodor Nöldeke, Compendious Syriac Grammar, Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns, 2001.</p>		
<学生に対する評価（方法・基準）>予習・復習、積極的な授業参加の状況、ペシッタのテキストの中から指定された箇所に関する発表によって成績をつける。評価にあたっては、「共通評価指標：講義・演習」の①～④の内容を重視する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		
聖書語学特殊研究 b	佐藤 泉	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>通年で履修するのが望ましい。	
<授業のテーマ>聖書の古代訳の一つにペシッタ（シリア語訳）がある。ペシッタを読むためのシリア語文法の基礎を学ぶ。さらに聖書の原典と古代訳との比較を行なう。		
<到達目標>①シリア語文法の基礎を身につける。②身につけたシリア語文法の基礎を生かし、辞書も使いながら、ペシッタを読むことができるようになる。③聖書の原典とペシッタや他の古代訳との比較を行なうことができるようになる。		
<授業の概要>シリア語文法の学びを継続する。その後に講読に入るが、まず新約からマタイによる福音書の「山上の説教」、さらに旧約からエレミヤ書等をペシッタで読み、さらに聖書の原典や他の古代訳との比較を行なう。（箇所は未定。授業中に指示する。）		
<履修条件>ヒブル語履修済みであること並びに聖書語学特殊研究 a（シリア語）履修済みであること。		
<授業計画> 第1回：不規則動詞について（1） Pè Nûn 動詞の変化を学ぶ。 第2回：不規則動詞について（2） Lamed 喉音動詞の変化を学ぶ。 第3回：不規則動詞について（3） Pè 'alep 動詞の変化を学ぶ。 第4回：不規則動詞について（4） Pè Yöd 動詞の変化を学ぶ。 第5回：不規則動詞について（5） 二根字動詞の変化を学ぶ。 第6回：不規則動詞について（6） 二重'ayin 動詞の変化を学ぶ。 第7回：不規則動詞について（7） Lamed 'alep・Lamed Yöd 動詞の変化を学ぶ。 第8回：「山上の説教」の講読（1） Jennings の辞書を引きながら、ペシッタを読むことに慣れる。 第9回：「山上の説教」の講読（2） 原典との比較をしつつ読むことを味わう。 第10回：「山上の説教」の講読（3） シリア語文法、特に不規則変化する名詞を確認しつつ読む。 第11回：「山上の説教」の講読（4） シリア語文法、特に動詞の変化を確認しつつ読む。 第12回：「山上の説教」の講読（5） シリア語が解釈に影響を与えている一例について話す。 第13回：エレミヤ書等の講読（1） ネストリウス派の書体・母音記号で読むことに慣れる。 第14回：エレミヤ書等の講読（2） シリア語文法を全体的に思い出しつつ読む。 第15回：エレミヤ書等の講読（3） 原典や七十人訳と比較しつつ読むことを味わう。		
<準備学習等の指示>授業中に指示のあった練習問題等について、できる範囲で準備すること。ヒブル語の文法も参照しておくこと。ペシッタの講読に関しては、原典にも目を通しておくこと。		
<テキスト>Theodore H. Robinson, Paradigms and Exercises in Syriac Grammar, 3 rd .ed., Oxford University Press, London, 1949.		
<参考書・参考資料等> William Jennings, Lexicon to the Syriac New Testament, Oxford at the Clarendon Press, 1926. ; Takamitsu Muraoka, Classical Syriac for Hebraists, Wiesbaden : O. Harrassowitz, 1987. ; Theodor Nöldeke, Compendious Syriac Grammar, Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns, 2001. ; J. Payne Smith, A compendious Syriac dictionary : founded upon the Thesaurus Syriacus of R. Payne Smith, Winona Lake, Ind. : Eisenbrauns, 1998. ; 左近義慈編著、本間敏雄改訂増補『ヒブル語入門』[改訂増補版] 教文館、2011 ; William L. Holladay, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament, Grand Rapids, 1971 ; Gustaf Dalman, Grammatik des jüdisch-palästinischen Aramäisch, Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1960 ; Gustaf Dalman, Aramäisch-Neuhebräisches Handwörterbuch, Göttingen : E. Pfeiffer, 1938 ; Marcus Jastrow, A dictionary of Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi, and the Midrashic literature v1, v2, New York: Pardes, 1950		
<学生に対する評価（方法・基準）>予習・復習、積極的な授業参加の状況、ペシッタのテキストの中から指定された箇所に関する発表によって成績をつける。評価にあたっては、「共通評価指標：講義・演習」の①～④の内容を重視する。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書原典特殊研究 a	遠藤 勝信	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<p><授業のテーマ> ヨハネによる福音書 20：01～21:25、01：01～18 の原典積義。ギリシア語新約聖書のテキストを歴史的、文学的、神学的文脈に基づいて解釈する方法を学ぶ。</p>		
<p><到達目標> 学生が、テキストと真摯に向き合う姿勢を学びつつ、聖書積義の方法を修得する。</p>		
<p><授業の概要> はじめに近年のヨハネ福音書研究の動向（研究史、方法論）を概観し、積義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。積義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。</p>		
<p><履修条件> 新約ギリシャ語原典テキスト読解力を有すること。ギリシャ語中級文法の知識があることが望ましい。</p>		
<p><授業計画></p> <p>I. 講義を中心に</p> <p>第01回 研究史を概観し、近年の研究状況と積義の諸問題を学ぶ。</p> <p>第02回 ギリシア語新約聖書本文批評の実際。</p> <p>第03回 テキストの文学批評の実際。</p> <p>第04回 テキストと歴史批評の実際。</p> <p>II. 演習（参加者による積義の発表とディスカッション）を中心に</p> <p>第05回 ヨハネ20：01～10の原典積義</p> <p>第06回 ヨハネ20：11～18の原典積義</p> <p>第07回 ヨハネ20：19～23の原典積義</p> <p>第08回 ヨハネ20：24～31の原典積義</p> <p>第09回 ヨハネ21：01～08の原典積義</p> <p>第10回 ヨハネ21：09～19の原典積義</p> <p>第11回 ヨハネ21：20～25の原典積義</p> <p>第12回 ヨハネ01：01～08の原典積義</p> <p>第13回 ヨハネ01：09～13の原典積義</p> <p>第14回 ヨハネ01：14～18の原典積義</p> <p>III. 総括</p> <p>第15回 積義演習の総括的な反省と展望。</p>		
<p><準備学習等の指示> クラスで取り上げる新約聖書テキストをギリシア語文法に則して読み、積義の問題点を明確にしてクラスに出席すること。</p>		
<p><テキスト> Nestle-Aland (28th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i></p>		
<p><参考書・参考資料等></p> <p>R・ブルトマン著、杉原助訳『ヨハネの福音書』、2005年</p> <p>R・A・カルペッパー著、伊東寿泰訳『ヨハネ福音書文学的解剖』2005年</p> <p>R・ボウカム、浅野淳博訳『イエスとその目撃者たち』2011年</p> <p>C.S. Keener, <i>The Gospel of John- A Commentary vol.1</i>, 2003.</p>		
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 授業における発表と期末試験（指定されたテキストについての積義ペーパー [8,000～10,000文字]）。積義ペーパーに、新約聖書学の基礎的理解及びテキストへの真摯な取り組みが反映されているかを評価。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。レポートは共通評価指標：講義・演習によって評価する。</p>		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		
新約聖書原典特殊研究 b	遠藤 勝信	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<p><授業のテーマ></p> <p>ヨハネの黙示録 08：01～11:06 までの原典積義。ギリシア語新約聖書のテキストを歴史的、文学的、神学的文脈に基づいて解釈する方法を学ぶ。</p>		
<p><到達目標></p> <p>学生が、テキストと真摯に向き合う姿勢を学びつつ、聖書積義の方法を修得する。</p>		
<p><授業の概要></p> <p>はじめに近年のヨハネ福音書研究の動向(研究史、方法論)を概観し、積義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。積義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。</p>		
<p><履修条件></p> <p>新約ギリシア語原典テキスト読解力を有すること。ギリシア語中級文法の知識があることが望ましい。</p>		
<p><授業計画></p> <p>I. 講義を中心に</p> <p>第01回 イントロダクション。黙示録の文学ジャンル。</p> <p>第02回 黙示録を読む前に(その1)：黙示録の周辺、背景理解。</p> <p>第03回 黙示録を読む前に(その2)：構造と構成、神学、他。</p> <p>第04回 黙示録1章～2章7節までを概観し、積義の営みにおける課題と観点を確認する。</p> <p>II. 演習(参加者による発表とディスカッション)を中心に</p> <p>第05回 黙示録06：01～06の原典積義</p> <p>第06回 黙示録08：01～05の原典積義</p> <p>第07回 黙示録08：06～13の原典積義</p> <p>第08回 黙示録09：01～06の原典積義</p> <p>第09回 黙示録09：07～12の原典積義</p> <p>第10回 黙示録09：13～16の原典積義</p> <p>第11回 黙示録09：17～21の原典積義</p> <p>第12回 黙示録10：01～07の原典積義</p> <p>第13回 黙示録10：08～11の原典積義</p> <p>第14回 黙示録11：01～06の原典積義</p> <p>III. 総括</p> <p>第15回 積義演習の総括的な反省と展望。</p>		
<p><準備学習等の指示></p> <p>クラスで取り上げる新約聖書テキストをギリシア語文法に則して読み、積義の問題点を明確にしてクラスに出席すること。</p>		
<p><テキスト></p> <p>Nestle-Aland (28th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i></p>		
<p><参考書・参考資料等></p> <p>佐竹明著『ヨハネの黙示録』(上・下巻) 2009年</p> <p>R・ボウカム著、飯郷友康・小河陽訳『ヨハネ黙示録の神学』2001年</p> <p>R. Bauckham, <i>The Climax of Prophecy</i>, 1993.</p> <p>G. Beale, <i>The Book of Revelation</i> (NIGTC), 1999.</p> <p>D. Aune, <i>Revelation 6-16</i> (WBC), 1997.</p> <p>S. Smalley, <i>The Revelation of John</i> (IVP), 2005. 他、クラスで随時紹介。</p>		
<p><学生に対する評価(方法・基準)></p> <p>授業における発表と期末試験(指定されたテキストについての積義ペーパー [8,000～10,000文字])。積義ペーパーに、新約聖書学の基礎的理解及びテキストへの真摯な取り組みが反映されているかを評価。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。レポートは共通評価指標：講義・演習によって評価する。</p>		

聖書神学専攻		
博士論文指導演習聖書神学 a	各指導教授	<担当形態>
前期・0単位	<登録条件>博士論文指導演習聖書神学 b と通年で登録すること。	
<p><授業のテーマ> 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。</p>		
<p><到達目標> 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。</p>		
<p><授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。</p>		
<p><履修条件> 博士課程後期課程に在学する聖書神学専攻者。</p>		
<p><授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。</p>		
<p><準備学習等の指示></p>		
<p><テキスト></p>		
<p><参考書・参考資料等></p>		
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p>		

聖書神学専攻		
博士論文指導演習聖書神学 b	各指導教授	<担当形態>
後期・0単位	<登録条件>博士論文指導演習聖書神学 a と通年で登録すること。	
<授業のテーマ> 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。		
<到達目標> 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。		
<授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。		
<履修条件> 博士課程後期課程に在学する聖書神学専攻者。		
<授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
<準備学習等の指示>		
<テキスト>		
<参考書・参考資料等>		
<学生に対する評価（方法・基準）>		

組織神学専攻・組織神学関係		
教義学特殊研究 a	須田 拓	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 学期毎の登録可	
<p><授業のテーマ> 聖霊論の諸相を学ぶことを通して、深い教義学の理解を持つことを目指す。</p>		
<p><到達目標> 聖霊論について、現代神学にどのような議論があるのかを知り、自分の研究テーマと関連させつつ、自らこの問題について深く考えることができるようになる。</p>		
<p><授業の概要> 聖霊論について講義を中心としつつ、博士後期課程の履修者による発表と意見表明を交えて進めてゆく。論点を整理した上で、現代の様々な神学者の議論を概観し、あるべき聖霊論の姿を模索する。</p>		
<p><履修条件> 特になし</p>		
<p><授業計画></p> <p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 聖霊論の論点(1) 聖霊の神性と位格性</p> <p>第3回 聖霊論の論点(2) 聖霊の御業</p> <p>第4回 位格としての聖霊(1) カール・バルトの場合とその問題</p> <p>第5回 位格としての聖霊(2) ヴォルフハルト・パネンベルクとユルゲン・モルトマンの場合</p> <p>第6回 位格としての聖霊(3) コリン・ガントンの場合</p> <p>第7回 位格としての聖霊(4) その他の神学者の場合 (バルコフ、ロジャース、コンガールなど)</p> <p>第8回 中間総括</p> <p>第9回 個人への聖霊の働き(1) バルトの場合</p> <p>第10回 個人への聖霊の働き(2) モルトマン、ヴェルカー、コンガールなどの場合</p> <p>第11回 個人への聖霊の働き(3) ピューリタン及びその他の神学者の場合</p> <p>第12回 聖霊と教会(1) 三位一体論的教会論 (ミロ斯拉フ・ヴォルフなど)</p> <p>第13回 聖霊と教会(2) スタンリー・ハワーワスの場合など</p> <p>第14回 聖霊と世界</p> <p>第15回 まとめ</p>		
<p><準備学習等の指示> 毎回、授業で扱う人物の著作を事前に読み、講義の最後にそれに対する意見を述べられるようにしておく。</p>		
<p><テキスト> 特になし</p>		
<p><参考書・参考資料等> 授業において、必要に応じて指示する。</p>		
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 授業における発表と意見表明、期末のレポート(6,000字程度)によって評価する。評価にあたっては、共通評価指標:講義・演習に基づいて評価する。</p>		

組織神学専攻・組織神学関係		
教義学特殊研究 b	須田 拓	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 学期毎の登録可	
<p><授業のテーマ> 創造論の諸相を学ぶことを通して、深い教義学の理解を持つことを目指す。</p>		
<p><到達目標> 創造論について、現代神学にどのような議論があるのかを知り、自分の研究テーマと関連させつつ、自らこの問題について深く考えることができるようになる。</p>		
<p><授業の概要> 創造論について講義を中心としつつ、博士後期課程の履修者による発表と意見表明を交えて進めてゆく。論点を整理した上で、現代の様々な神学者の議論を概観し、あるべき創造論の姿を模索する。</p>		
<p><履修条件> 特になし</p>		
<p><授業計画></p> <p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 創造論の論点(1) 創造の起源、無からの創造</p> <p>第3回 創造論の論点(2) 三位一体と創造、人間論</p> <p>第4回 創造論の論点(3) 創造と摂理、救済</p> <p>第5回 創造の起源について (バルト、パネンベルク、ティリッヒら)</p> <p>第6回 三位一体論的創造論(1) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合</p> <p>第7回 三位一体論的創造論(2) ユルゲン・モルトマンの場合</p> <p>第8回 三位一体論的創造論(3) コリン・ガントンの場合、その他</p> <p>第9回 中間総括</p> <p>第10回 創造と救済(1) 閉じられた創造論と開かれた創造論</p> <p>第11回 創造と救済(2) 様々な神学者の場合</p> <p>第12回 創造と人間(1) パネンベルク、モルトマンらの場合</p> <p>第13回 創造と人間(2) ロバート・ジェンソン、コリン・ガントンらの場合</p> <p>第14回 創造論の現代的課題</p> <p>第15回 まとめ</p>		
<p><準備学習等の指示> 毎回、授業で扱う人物の著作を事前に読み、講義の最後にそれに対する意見を述べられるようにしておく。</p>		
<p><テキスト> 特になし</p>		
<p><参考書・参考資料等> 授業において、必要に応じて指示する。</p>		
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 授業における発表と意見表明、期末のレポート(6,000字程度)によって評価する。評価にあたっては、共通評価指標:講義・演習に基づいて評価する。</p>		

組織神学専攻・組織神学関係		
組織神学特殊研究 a 現代哲学特殊研究 a	神代 真砂実	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 特になし。	
<授業のテーマ> 組織神学の代表的文献であるカール・バルトの『教会教義学』中の和解論から贖罪論にあたる部分を学ぶことで、バルトの神学思想について深い理解を得、自分なりの評価を下せるようにする。		
<到達目標> ①バルトの神学的思惟の特徴を理解する。②バルトを通して、贖罪論についての総合的な理解を身に着ける。③当該主題についてのバルト神学の貢献と問題点を理解し、自分なりの評価をレポートのかたちで説得力をもって表明できるようにする。		
<授業の概要> バルトの『教会教義学』から和解論の60節「人間の傲慢と墮落」に展開される議論を学ぶ。テキストを精読し、その内容についての議論を重ね、また、適宜、解説を加えることで理解を深める。		
<履修条件> 前期課程との合同（並行）授業のため、後期課程の履修者は前期課程の学生よりも常に少なくとも一歩から二歩先んじた準備が期待されている。また、議論をリードする役割も求められる。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 テキスト、3～28頁（60節 1. 神の御子の従順の鏡に映った人間の罪①） 第3回 同、28～53頁（同②） 第4回 同、53～72頁（同③） 第5回 同、72～82頁（同④） 第6回 同、82～101頁（同⑤） 第7回 同、102～120頁（2. 人間の傲慢①） 第8回 同、120～136頁（同②） 第9回 同、136～159頁（同③） 第10回 同、159～181頁（同④） 第11回 同、181～199頁（同⑤） 第12回 同、200～216頁（同⑥） 第13回 同、217～242頁（3. 人間の墮落①） 第14回 同、242～259頁（同②） 第15回 同、259～282頁（同③）		
<準備学習等の指示> 演習なので、必ずテキストをよく読んでから出席することはもちろんであるが、さらに、テキストの内容に関連する事柄について自分から積極的にリサーチし、考察し、問題点を整理しておくこと。		
<テキスト> カール・バルト、『教会教義学・和解論 I / 3 僕としての主イエス・キリスト 中』、井上良雄訳（新教出版社、オンデマンド）。		
<参考書・参考資料等> 授業の中で適宜、紹介するが、Geoffrey W. Bromiley, <i>An Introduction to the Theology of Karl Barth</i> 中の当該箇所についての記述には必ず目を通しておくこと。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業への参加度（議論におけるリーダーシップを含む）、小課題、および期末のレポート（本文 6,000 字以上）による。共通評価指標：講義・演習に準拠して評価を与える。		

組織神学専攻・組織神学関係		
組織神学特殊研究 b 現代哲学特殊研究 b	神代 真砂実	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 特になし。	
<授業のテーマ> 前期と同じ。		
<到達目標> 前期と同じ。		
<授業の概要> バルトの『教会教義学』から和解論の 61 節「人間の義認」に展開される議論を学ぶ。テキストを精読し、その内容についての議論を重ね、また、適宜、解説を加えることで理解を深める。		
<履修条件> 前期と同じ。		
<授業計画> 第 1 回 オリエンテーション、テキスト、283～294 頁 (61 節 1. 義認論の問題①) 第 2 回 テキスト、294～309 頁 (同②) 第 3 回 同、310～326 頁 (2. 神の審き①) 第 4 回 同、327～347 頁 (同②) 第 5 回 同、347～365 頁 (同③) 第 6 回 同、365～380 頁 (同④) 第 7 回 同、381～396 頁 (3. 人間の赦免①) 第 8 回 同、396～404 頁 (同②) 第 9 回 同、404～423 頁 (同③) 第 10 回 同、423～441 頁 (同④) 第 11 回 同、441～453 頁 (同⑤) 第 12 回 同、454～464 頁 (4. ただ信仰による義認①) 第 13 回 同、465～488 頁 (同②) 第 14 回 同、488～505 頁 (同③) 第 15 回 同、505～516 頁 (同④)		
<準備学習等の指示> 前期と同じ。		
<テキスト> 前期と同じ。		
<参考書・参考資料等> 前期と同じ。		
<学生に対する評価(方法・基準)> 授業への参加度(議論におけるリーダーシップを含む)、小課題、および期末のレポート(本文 6,000 字以上)による。共通評価指標: 講義・演習に準拠して評価を与える。		

組織神学専攻・組織神学関係		
現代神学特殊研究 a	芳賀 力	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<p><授業のテーマ> W. パネンベルクの聖霊論、教会論、 sacrament論がバルト神学以降の現代神学の流れの中でどのような意義を持っているかを、彼の『組織神学第三卷』の前半部分をテキストとして検証する。</p>		
<p><到達目標> W. パネンベルクの聖霊論、教会論、 sacrament論が彼の組織神学全体の構想の中でどのような特徴を持っているのかを明確化する。</p>		
<p><授業の概要> 担当者を決め、順番に該当箇所を要約し、問題提起的にコメントする。担当に当たっていない場合でも、教室での議論をリードするように心がける。</p>		
<p><履修条件> 博士課程後期に在籍している者。専攻にこだわらない。</p>		
<p><授業計画></p> <p>第1回 オリエンテーション 第2回 テキストの 19～45 頁 第3回 テキストの 45～64 頁 第4回 テキストの 64～84 頁 第5回 テキストの 85～111 頁 第6回 テキストの 113～136 頁 第7回 テキストの 137～159 頁 第8回 テキストの 160～189 頁 第9回 テキストの 190～214 頁 第10回 テキストの 215～240 頁 第11回 テキストの 240～263 頁 第12回 テキストの 264～290 頁 第13回 テキストの 290～313 頁 第14回 テキストの 313～340 頁 第15回 総括</p>		
<p><準備学習等の指示> 次の回のテキストを前もって読み、博士課程前期課程在籍の学生たちの議論をリードするように心がける。</p>		
<p><テキスト> W. パネンベルク『組織神学第三卷』佐々木勝彦訳、新教出版社、2021年。自分で購入してもよいが、高価なため部分的にコピーを用意してもよい。</p>		
<p><参考書・参考資料等> 授業の中で必要に応じて指示する。</p>		
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 学期末に自分の博士論文のテーマと絡ませた小論文的なレポートを提出する。共通評価指標：講義・演習に基づいて評価する。</p>		

組織神学専攻・組織神学関係		
現代神学特殊研究 b	芳賀 力	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<p><授業のテーマ></p> <p>後期では、W. パネンベルクの sacrament 論、教会職務論、終末論がバルト神学以降の現代神学の流れの中でどのような意義を持っているかを、彼の『組織神学第三卷』の後半部分をテキストとして検証する。</p>		
<p><到達目標></p> <p>後期では、W. パネンベルクの sacrament 論、教会職務論、終末論が彼の組織神学全体の構想の中でどのような特質を持っているのかを明確化する。</p>		
<p><授業の概要></p> <p>担当を決め、順番に該当箇所を要約し、問題提起的にコメントする。担当に当たっていない場合でも、教室での議論をリードするように心がける。</p>		
<p><履修条件></p> <p>博士課程後期に在籍している者。専攻にこだわらない。</p>		
<p><授業計画></p> <p>第1回 テキストの 340～362 頁 第2回 テキストの 362～386 頁 第3回 テキストの 387～405 頁 第4回 テキストの 406～427 頁 第5回 テキストの 428～445 頁 第6回 テキストの 447～474 頁 第7回 テキストの 474～494 頁 第8回 テキストの 495～518 頁 第9回 テキストの 519～542 頁 第10回 テキストの 543～564 頁 第11回 テキストの 565～587 頁 第12回 テキストの 588～607 頁 第13回 テキストの 607～630 頁 第14回 テキストの 631～656 頁 第15回 総括</p>		
<p><準備学習等の指示></p> <p>次の回のテキストを前もって読み、博士課程前期課程在籍の学生たちの議論をリードするように心がける。</p>		
<p><テキスト></p> <p>W. パネンベルク『組織神学第三卷』佐々木勝彦訳、新教出版社、2021 年。自分で購入してもよいが、高価なため部分的にコピーを用意してもよい。</p>		
<p><参考書・参考資料等></p> <p>授業の中で必要に応じて指示する。</p>		
<p><学生に対する評価（方法・基準）></p> <p>学期末に自分の博士論文のテーマと絡ませた小論文的なレポートを提出する。共通評価指標：講義・演習に基づいて評価する。</p>		

組織神学専攻・歴史神学関係		
神学史特殊研究 a	棚村 重行	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 通年で履修することが望ましい。	
<授業のテーマ> 「英米日・福音主義の歴史—神学・信仰復興・教会形成」。前期では、17～19世紀半ばまでの英米日の福音主義神学思想の第一次史料を読み、履修生各自が自らの第二次史料（論文）を作成する過程も学ぶ。		
<到達目標> 履修者が、英米日の教会関係史のコンテクストにおいて、17世紀～20世紀の主要な信仰復興・教会形成の福音主義神学にかんする第一次史料テキストを読み、歴史洞察を深めることを目指す。以上の目標を、後期課程の受講者の博士論文のテーマと関連づけて理解し、展開してゆく応用力の発揮を、レポートで立証する。		
<授業の概要> 前期では、最初に日本の「福音主義の歴史」研究の批評を行う。その上で「国際教会関係史」の観点を提起し、17～19世紀前半（1650-1860）までの英米のピューリタニズム移植、第一次、第二次大覚醒運動期の福音主義神学と信仰復興運動論、教会形成史について、講義と史料分析を行う。		
<履修条件> 現代・近代プロテスタント神学思想の基本的な知識、あるいは英米教会史・神学思想史などへの関心が必要である。		
<p><授業計画></p> <p>第1回：コース紹介。導入講義：日本の「福音主義」「福音主義の歴史」研究の批評（佐藤敏、古屋、青木他）</p> <p>第2回：講義（一）：アメリカ教会史と神学思想史論の吟味：F. ボンヘッファー、W. G. マックラクリン他。</p> <p>第3回：史料分析（一）：17～18世紀「ピューリタン大覚醒」（T. フッカー）と英国メソジズム（ウェスレー）。</p> <p>第4回：講義（二）：18世紀北米における「第一次大覚醒運動」（1730～1760）植民地時代の三大教派の出現。</p> <p>第5回：史料分析（二）：J. エドワーズ（1）：「[ニューイングランド信仰復興の忠実な報告]」他。</p> <p>第6回：史料分析（三）：J. エドワーズ（2）：「信仰復興についての幾つかの考察」他。</p> <p>第7回：講義（三）：18世紀北米のメソジズム神学、信仰復興、教会形成：「宗教箇条」、A. クラーク等。</p> <p>第8回：講義（四）：19世紀前半の「第二次大覚醒運動」（1800～1830）開拓時代の三大教派成長。</p> <p>第9回：史料分析（四）：19世紀前半の新派カルヴァン主義神学の誕生：N. W. テイラー、L. ビーチャー等。</p> <p>第10回：史料分析（五）：C. G. フィニー（1）：回心についての説教、「組織神学」から。</p> <p>第11回：史料分析（六）：C. G. フィニー（2）：「宗教の復興とは何か？」</p> <p>第12回：史料分析（七）：長老派内の新派カルヴァン主義：A. バーンズ 「救いの道」</p> <p>第13回：史料分析（五）：メソジストの神学、信仰復興、教会形成：P. カートライト、D. D. ウィードン。</p> <p>第14回：講義（五）：幕末開国期日本：改革派-長老派-衆衆派型およびメソジスト型「二つの福音」問題</p> <p>第15回：講義（六）：若き植村正久、本多庸一：福音主義神学、信仰復興、教会形成。FD実施</p>		
<準備学習等の指示> テキストの予習と復習が大切である。とくに予習に力を入れ、授業中の議論を準備すること。二次史料の予習を通して、授業中の議論を準備すること。更に授業に参加し、自らの研究のテーマを見出し、研究論文を作成する技術を見出すこと。		
<テキスト> ①W. G. McLoughlin, <i>The American Evangelicals, 1800-1900</i> , Harper and Low, 1968(コピー本で配布) ②D. A. Sweeney, <i>The American Evangelical Story</i> , Baker, 2005. (部分的にコピー資料として配布)		
<参考書・参考資料等> 授業中に追って紹介する。特に、S. E. Ahlstrom, <i>Theology in America</i> の必要資料はコピーして配布する。		
<学生に対する評価(方法・基準)> 前期で扱ったテーマを一つ取り上げ、それに関連した重要な第一次史料を批判的に分析し自分の解釈にもとづくレポートを作成し、提出する。分量は400字詰め原稿用紙に換算して25-30枚以内。レポートは共通評価指標：講義・演習によって評価する。		

組織神学専攻・歴史神学関係		
神学史特殊研究 b	棚村 重行	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 通年で履修することが望ましい。	
<授業のテーマ> 「英米日・福音主義の歴史—神学・信仰復興・教会形成」。後期では、19世紀半ばから20世紀末までの英米日福音主義の神学思想の第一次史料を読み、履修生各自が自らの第二次史料（論文）を作成する過程も学ぶ。		
<到達目標> 英米日の教会関係史のコンテキストにおいて、17世紀～20世紀の主要な信仰復興・教会形成の福音主義神学の第一次史料テキストを読み、歴史洞察を深める以上の目標を、後期課程の受講者の博士論文のテーマと関連づけて理解し、展開してゆく応用力の発揮を、レポートで立証する。		
<授業の概要> 後期では、最初に日本の「福音主義の歴史」研究の批評を行う。その上で「国際教会関係史」の観点を確立し、19世紀後半～20世紀後半（1865-2010）までの米日の第三次、第四次大覚醒運動期の福音主義神学と信仰復興運動論、教会形成史について講義と史料分析を行う。		
<履修条件> 前期に同じ。		
<授業計画>		
第1回：コースの紹介。講義（一）「マックラクリンの北米大覚醒運動史」のおさらい		
第2回：講義（二）：19世紀後半の北米神学の諸相：南北戦争以後の北米の社会と宗教の変貌（T.L. スミス）		
第3回：史料分析（一）：19世紀後半の「第三次大覚醒運動」（1870～1920）「都市の信仰復興」について		
第4回：史料分析（二）：D.L. ムーディー（1）：ムーディーの諸説教にみる福音主義神学と教会		
第5回：史料分析（三）：D.L. ムーディー（2）：彼の信仰復興論「教会に行かぬ人に福音をどう届けるか？」		
第6回：講義（三）：20世紀初頭の日本の「大挙伝道」および「神の国」運動：本多庸一、植村正久、賀川豊彦		
第7回：史料分析（四）：20世紀前半の第一次世界大戦後の北米の「近代主義」対「根本主義」論争、新正統主義神学について（H. R. ニーパーと熊野義孝）		
第8回：講義（四）：A. J. シンプソン：『四重の福音』；A. J. ゴードン『み霊の務め』		
第9回：史料分析（五）：日本における神学の変貌：中田重治のホーリネス神学と逢坂元吉郎の高教会神学		
第10回：講義（五）：20世紀後半の「第四次大覚醒〔戦後信仰復興〕運動」（1950～1990?）		
第11回：史料分析（六）：ビリー・グラハム（1）：略歴と神学諸テーマ（啓示、創造と墮罪、贖罪）		
第12回：史料分析（七）：ビリー・グラハム（2）：諸テーマ（救済、教会、説教と聖礼典、終末論）		
第13回：講義（六）：第二次世界大戦後日本における「戦後信仰復興運動」の神学、信仰復興、教会形成。		
第14回：講義（七）：1980年代後の英米日の福音主義諸派の動向：北米の「宗教的右派」、「福音派」の動向。		
第15回：総合討論：通年の学びからみた「福音主義」とその歴史の総括。FD実施。		
<準備学習等の指示> 前期に同じ。		
<テキスト> ①W. G. McLoughlin, <i>The American Evangelicals, 1800-1900</i> , Harper and Low, 1968(コピー本で配布) ② D. A. Sweeney, <i>The American Evangelical Story</i> , Baker, 2005. (部分的にコピー資料として配布)		
<参考書・参考資料等> 授業の中で、教員が追って指示する。Ahlstrom, <i>Theology in America</i> の資料コピーを配布する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 後期で扱ったテーマを一つ取り上げ、それに関連した重要な第一次史料を批判的に分析し自分の解釈にもとづくレポートを作成せよ。分量は400字詰め原稿用紙に換算して25-30枚以内。レポートは共通評価指標：講義・演習によって評価する。		

組織神学専攻・実践神学関係		
キリスト教教育特殊研究 a	朴 憲郁	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>特になし	
<授業のテーマ> キリスト教的<人格>教育		
<到達目標> 人間形成として人格教育を一般教育学的に概観した後、神学的に把握し、有効に実践に結びつけることを学ぶ。		
<授業の概要> 戦前の教育勅語を排し、教育基本法に基づく新教育が一斉に始まったが、どのキリスト教学校も自らの特色ある教育の使命として、キリスト教精神によってこそ真の人格教育を遂行し、公教育に貢献し得ることを掲げてきた。では、それはどのように理論構築され、実践されてきたのであろうか。今回は、この問題をめぐる宗教教育学的な考察を試みる。		
<履修条件> 後期課程履修生は前期課程履修生の議論を導くような発言を期待する。		
<授業計画> 第1回 一般教育学的理論 第2回 近代の発端としての人格的な宗教と教育（シュライエルマッハーとルターを中心に） （第3回から14回まで受講者が発表し、討論とコメントをする） 第3回 「神の像」概念に基づく教育的展開（モルトマンの創造論より）－その1 第4回 「神の像」概念に基づく教育的展開（モルトマンの創造論より）－その2 第5回 「神の像」としての人間形成の問題（ブルナーとバルトの神学的人間論より）－その1 第6回 「神の像」としての人間形成の問題（ブルナーとバルトの神学的人間論より）－その2 第7回 「神の像」における自己同一性・人格・自由を巡って－その1 第8回 「神の像」における自己同一性・人格・自由を巡って－その2 第9回 「キリスト教的人間形成と教育」－その1 第10回 「キリスト教的人間形成と教育」－その2 第11回 国家と宗教教育（南原繁の政治教育思想から）－その1 第12回 国家と宗教教育（南原繁の政治教育思想から）－その2 第13回 日本における道徳と宗教の教育（田中耕太郎の場合）－その1 第14回 日本における道徳と宗教の教育（田中耕太郎の場合）－その2 第15回 全体的反省と総括		
<準備学習等の指示> 全員、事前にテキストの当該箇所を目を通してディスカッションできる備えをする。後期課程履修生は質問や意見を用意して、議論の活性化を目指す。履修者は何度かテキストを発表し、その後に相互討論する。		
<テキスト> 朴 憲郁、『現代キリスト教教育学研究－神学と教育の間で－』、日本キリスト教団出版局、2020年8月		
<参考書・参考資料等> 授業の中で随時紹介する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業時の発表、討論への参加度、およびレポート（4,000字程度）によって評価する。 2/3以上の授業出席者を評価の対象とする。共通評価指標：講義・演習の①～④の内容を重視する。		

組織神学専攻・実践神学関係		
キリスト教教育特殊研究 b	朴 憲郁	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>特になし	
<授業のテーマ> 教会教育の諸相		
<到達目標> 告白的共同体である教会の教育的職務を正しく把握し、それに基づいて有効に実践する道筋を学ぶ。		
<授業の概要> 教会に委ねられた三つの職務の一つであるディダケーの諸局面の内、児童礼拝（教会学校）と説教について学び、次に北米における教会教育論を代表的な宗教教育学者から学び、最後に「キリストの体」への入信儀礼である洗礼・堅信を巡る教会教育の歴史的・実践神学的な考察をする。		
<履修条件> 後期課程履修生は前期課程履修生の議論を導くような発言を期待する。		
<授業計画> 第1回 教会教育学の出現とその特性－その1 第2回 教会教育学の出現とその特性－その2 第3回 教会に仕える児童礼拝とその説教－その1 第4回 教会に仕える児童礼拝とその説教－その2 第5回 北米における教会教育論（J.H. ウェスターホフの場合）－その1 第6回 北米における教会教育論（J.H. ウェスターホフの場合）－その2 第7回 北米における教会教育論（J.H. ウェスターホフの場合）－その3 第8回 北米における教会教育論（Ch. R. フォスターの場合）－その1 第9回 北米における教会教育論（Ch. R. フォスターの場合）－その2 第10回 受洗志願者教育の意義－日本の教会の文脈において 第11回 洗礼・堅信を巡る教会教育（歴史的考察）－その1 第12回 洗礼・堅信を巡る教会教育（歴史的考察）－その2 第13回 洗礼・堅信を巡る教会教育（実践神学的考察）－その1 第14回 洗礼・堅信を巡る教会教育（実践神学的考察）－その2 第15回 全体的反省と総括		
<準備学習等の指示> 全員、事前にテキストの当該箇所に通してディスカッションできる備えをする。後期課程履修生は質問や意見を用意して、議論の活性化を目指す。履修者は何度かテキストを発表し、その後に相互討論する。		
<テキスト> 朴 憲郁、『現代キリスト教教育学研究－神学と教育の間で－』、日本キリスト教団出版局、2020年8月 J.H. ウェスターホフ、『子どもの信仰と教会』－教会教育の新しい可能性、新教出版社、1998年(2版) J.L. シーモア編、『キリスト教教育の現代的展開』、第3章:Ch. R. フォスター、「キリスト教教育と信仰共同体」、新教出版社、1987年		
<参考書・参考資料等> 授業の中で随時紹介する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業時の発表、討論への参加度、およびレポート(4,000字程度)によって評価する。 2/3以上の授業出席者を評価の対象とする。共通評価指標：講義・演習の①～④の内容を重視する。		

組織神学専攻		
博士論文指導演習組織神学 a	各指導教授	<担当形態>
前期・0単位	<登録条件>博士論文指導演習組織神学 b と通年で登録すること。	
<p><授業のテーマ> 学生各自の研究課題に従い、博士論文のテーマを設定し、研究を深め、論文を執筆する。</p>		
<p><到達目標> 第一次文献の読解や第二次文献との対論などを通して、具体的に博士論文の部分的作成に寄与する。</p>		
<p><授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容・表現などについて指導教授と対話しつつ、実際に博士論文の作成にあたる。</p>		
<p><履修条件> 博士課程後期課程に在学する組織神学専攻者。</p>		
<p><授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。</p>		
<p><準備学習等の指示> 小まめに指導教授と面談し、アドバイスを受けるようにする。</p>		
<p><テキスト> 面談の中で指示する。</p>		
<p><参考書・参考資料等> 面談の中で指示する。</p>		
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 博士論文の共通評価指標に従う。</p>		

組織神学専攻		
博士論文指導演習組織神学 b	各指導教授	<担当形態>
後期・0単位	<登録条件>博士論文指導演習組織神学 a と通年で登録すること。	
<p><授業のテーマ> 設定したテーマのもとで、さらに研究を深め、論文を執筆する。</p>		
<p><到達目標> 第一次文献の読解や第二次文献との対論などを通して、具体的に博士論文の部分的作成に寄与する。</p>		
<p><授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容・表現などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。</p>		
<p><履修条件> 博士課程後期課程に在学する組織神学専攻者。</p>		
<p><授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。</p>		
<p><準備学習等の指示> 小まめに指導教授と面談し、アドバイスを受けるようにする。</p>		
<p><テキスト> 面談の中で指示する。</p>		
<p><参考書・参考資料等> 面談の中で指示する。</p>		
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 博士論文の共通評価指標に従う。</p>		